皮膚科

（スタッフ）

部長　　：竹尾　直子（2020. 4月から）
　　：島田　浩光（2020. 3月まで）
副部長　　：竹尾　直子（2020. 2月から3月まで）
主任医師　：中村　優佑
嘱託医　　：轟木　麻子
専攻医　　：角沖　史野（2020. 4月から）
外来看護師：森田　緑
　　：荒井　薫
医療秘書　：三苫　菜笑

初期研修医ローテートは次のとおりでした。
時永　優希（2020. 1月）
杉本　未来（2020. 2月・3月・7月）
山原　茉莉（2020. 6月）
後藤　未央（2020. 9月）
石嶋　寛子（2020. 10月・11月）
上野　愛実（2020. 12月）

（診療実績）

入院：8階西病棟　8床
クリニカルパス
・円形脱毛症に対するステロイドパルス療法・帯状疱疹・皮膚腫瘍切除術・丹毒、蜂窩織炎
外来：月曜・水曜・金曜　　初診完全予約制
2020年7月に皮膚科外来は旧消化器内科外来の場所に移動
手術：火曜AM・木曜PM

【入院・手術】

2020年の延べ入院患者数、入院稼働額、手術件数は2019年と比較して大幅に減少し、厳しい1年でした（表）。2019年と2020年の主な入院疾患数を比較すると、2020年はほぼ全ての疾患数で減少がみられますが、手術症例や薬疹、蕁麻疹、自己免疫性水疱症などの非感染性皮膚疾患の減少率は高く、また、帯状疱疹の入院数の減少もみられる一方で、蜂窩織炎・丹毒の細菌感染症の入院減少率は低くなっています（図1）。これは、2020年はコロナ禍の中で、非感染性皮膚疾患や軽症の帯状疱疹では入院を控える傾向があったものと推測します。

【外来】

2020年の延べ外来患者数、新患患者数、紹介患者数、院内コンサルト数、外来稼働額はいずれも2019年と比較して減少したものの、減少率は低く抑えられ（表）、特に、紹介患者数、院内コンサルト件数は2019年とほとんど変化がなく、地域医療や当院における科の役割は果たしています。光線治療件数は2019年と比較して大幅に減少しましたが（図2）、光線治療は頻回の通院が必要になるために敬遠された可能性が考えられました。また、生物学的製剤の使用量は乾癬、アトピー性皮膚炎で減少し（図3A、B）、特発性慢性蕁麻疹で増加しました（図3C）。

（今後の方向性）

2021年の当科の方向性は、患者減少率の高い入院と手術の強化と、患者減少率の低い外来をさらに強化することですが、コロナ禍の影響により、2021年も引き続き、入院控えは続くと思われ、その中で、患者に必要な皮膚科医療をどう提供していくのかが2021年の課題と思われます。また、当科は女性医師が多く、妊娠、出産、育児により働き方が制限される時期に女性医師が働き続けることができる環境を作る必要があり、難しい舵取りが要求されます。

具体的な方策を以下に示します。

①大分大学医学部附属病院皮膚科とも連携し、入院患者や手術患者の受け入れ体制を強化します
②アトピー性皮膚炎の教育入院や無汗症や薬剤アレルギーの検査入院などのクリニカルパスを作成し、開業医に周知します
③乾癬の生物学的製剤承認施設として、科全体で生物学的製剤の適切な使用に努め、きめ細かいフォローのためのシステム作りを行います
④入院患者は複数主治医制とし、疾患毎の治療法、検査法を電子カルテ内にセット登録し、バックアップ体制を強化します

（文責：竹尾直子）

表　昨年との比較

		2019 年	2020 年	前年比率
外来	延べ外来患者数（人）	11,116	9,401	86%
	新外来患者数（人）	1,218	915	72%
	紹介患者数（人）	510	468	92%
	院内コンサルト件数（件）	799	768	96%
	外来稼働額（円）	203,805,316	97,576,708	87%
入院	延べ入院患者数（人）	3,664	1,895	50%
	入院稼働額（円）	147,005,522	76,901,140	52%
手術	手術件数（件）	88	30	30%

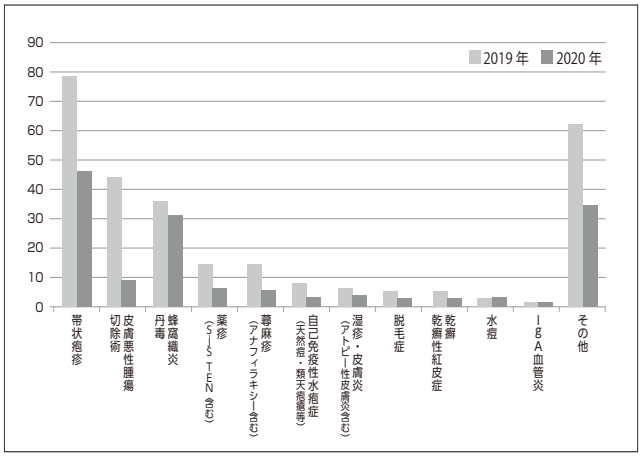
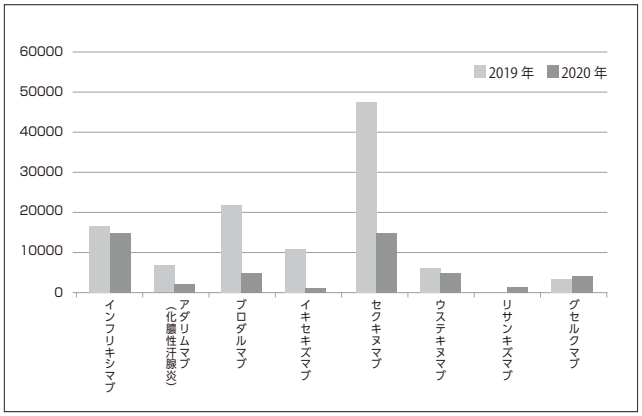


図１　主な入院疾患件数



（縦軸の単位：mg）

図３Ａ　生物学的製剤使用量（尋常性乾癬）

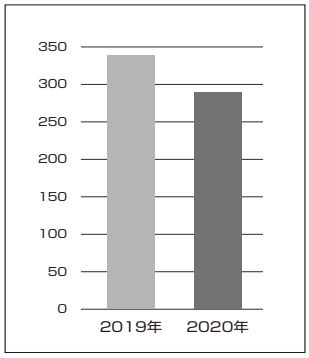
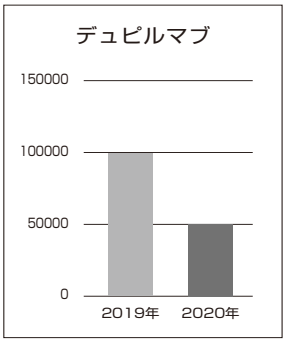
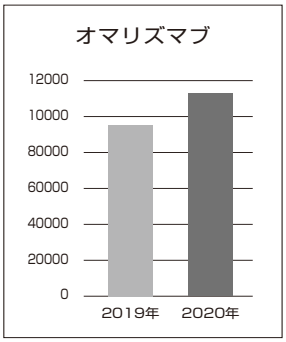


図２　光線治療（ナローバンドUVB・エキシマライト）件数



（縦軸の単位：mg）

図３Ｂ　生物学的製剤使用量（アトピー性皮膚炎）



（縦軸の単位：mg）

図３Ｃ　生物学的製剤使用量（慢性特発性蕁麻疹）